

# 平成 27 年度 聴覚活用委員会の取り組み

山縣 浅日 木村 淳子 寺井 寛 久川浩太郎  
藤本裕美子 石井 清一 橋本 時浩

平成 27 年度聴覚活用委員会の取り組みとして、教職員を対象に行った夏季校内研修、各部へ配布した補聴だよりとポスターについて報告する。併せて、各部の良聴耳平均聴力及び人工内耳装用状況についても昨年度に引き続き報告する。

【キーワード】 教職員研修 補聴ポスター 補聴だより 良聴耳平均聴力

## 1 はじめに

近年では、新生児聴覚スクリーニング検査の普及、早期の教育開始、デジタル補聴器・人工内耳等の補聴技術の進歩等に伴い、聴覚活用に根差した教育の可能性が大きく高まってきている。

聴覚活用委員会では、幼児児童生徒の補聴環境を整え、教職員の共通理解をはかること、また、保護者や幼児児童生徒の意識向上につなげることを目的とした取り組みを行っている。委員会メンバーは、各学部から1名ずつ、教務から2名、計7名の構成となっている。

## 2 教職員研修

### (1) 聴力測定に関する研修会

本校では、定期聴力測定として、幼稚部では年3回、小学部以上は年1回を目安に聴力測定（裸耳聴力測定・装用閾値測定）を実施している。この他、必要に応じて聴力測定を実施しており、学級担任が中心となって行っている。今年度も、教職員の力量向上を目的とした研修を企画した。

#### ① 実施時期・回数・参加者

夏期休業中に2回実施した。主な対象者を初任の教職員として参加希望者を募った。1回の研修時間は約30分を設定した。1コマあたりの人数は5名程度と計画していたが、結果としては初任以外の参加もあり、2回の合計で14名（養護教諭・寄宿舎指導

員含む）の参加があった。

#### ② 研修テキスト

委員会で昨年度作成したテキスト（全28ページ）を用いた。

#### ③ 研修の形態

実際にオーディオメータを示しながら講義形式で行った。

### (2) きこえに関する研修会

今年度は新たに「指導に活かすきこえの知識」と題した研修会を開催した。普段接する子どもたちを想定しながら指導上の配慮について考える機会となるようにした。

#### ① 実施時期・回数・参加者

夏期休業中に4回実施した。参加希望を募り4回で計31名（養護教諭・寄宿舎指導員含む）の参加があった。

#### ② 研修テキスト

今回委員会で作成したテキスト（全23ページ）を用いた。

#### ③ 研修の形態

委員会メンバーが講師を務めた。指導場面のVTRや語音検査の結果も示した。また参加者が実際に補聴器のデモ器や電池チェッカーを扱い、音を聞いて確かめたり、オーディオグラムに記入したりという演習も行った。

### (3) 研修後のアンケート

研修後、アンケートフォームへの入力または用紙提出のいずれかで参加者からの回答をお願いした。結果は以下の通りである。

- ① 開催時期について
  - ・ちょうど良い (全 36 名)
- ② 研修時間について
  - ・ちょうど良い (28 名)
  - ・短い (6 名)
  - ・その他 (1 名)
- ③ 1 枠あたりの人数について
  - ・ちょうど良い (33 名)
  - ・その他 (2 名)
  - ・無回答 (1 名)
- ④ 内容・やり方について
  - ・良い (34 名)
  - ・改善すべき (1 名)
  - ・無回答 (1 名)
- ⑤ 今後の研修についての希望 (複数回答可)
  - ・人工内耳 (21 名)
  - ・日常生活での配慮 (19 名)
  - ・メーカーによる研修 (11 名)
  - ・語音検査 (11 名)
  - ・事例検討 (11 名)
  - ・耳の仕組み・聴覚 (10 名)
- ⑥ その他感想・意見など (抜粋)
  - ・実際に補聴器を試聴したり、発音指導のビデオを見たりでき、記憶に残りやすい形で把握できた。
  - ・感音性難聴のシュミレーションが分かりやすかった。
  - ・今まで知っていたことの再確認もでき、良い機会だった。
  - ・聴力データをドメインにアップして、その見方の説明も見られると良い。

### (4) 質問への回答集

研修後、参加者から出された九つの質問をまとめ、それらに回答する形の冊子を作成した。全校の職員と共有できるように、データは校内のドメインにあ

げて閲覧できるようにした。

### (5) 考察

アンケートから、より具体的な研修の必要があることがわかった。実際に補聴器の音を聞いてみることや指導場面の VTR 視聴は参加者に好評であった。聴力測定研修では、オージオメータを参加者が実際に使用する時間を十分確保できなかったことが課題である。今後は参加人数や時間の調整をし、より実地的な研修となるようにしたい。

参加者はいずれも意欲的に研修に臨んでおり、こうした校内研修の場が定期的に確保される必要がある。

## 3 補聴に関するポスターの作成

聴覚活用委員会では昨年度に引き続き、補聴に関するポスターを作成した。児童生徒に身近な題材を取り上げ、補聴機器や聴覚障害に対して興味関心が高まるようにした。ポスターは A2 サイズで作成し、校内 9 か所に掲示した。今年度は、1 学期号 (図 1)、2 学期号 (図 2)、3 学期号 (予定) を発行し、今後も継続して発行する予定である。小学部の児童に対しては内容を厳選し、振り仮名をつけることで、より分かりやすく親しみやすいポスターを作成した。

### (1) 1 学期号「コミュニケーション機器を知ろう」

聴覚障害者が生活する上で情報の入手は大変重要なことである。そこで、身の周りにある補聴システムや、情報入手に関する機器、コミュニケーション機器を取り上げた。補聴システムでは、磁気誘導ループシステムと FM 補聴システムを取り上げ、普段授業で使用している補聴システムや、状況に合わせた補聴システムがあることを理解できるようにした。情報入手に関する機器では、身近な FAX から、玄関チャイムやノックの音などを光や振動で知らせる機器など、より便利に暮らすために様々な機器を紹介した。コミュニケーション機器では、タブレット端末を利用した筆談アプリも紹介した。高等部の生徒はタブレット端末を持っている生徒が多

く、ポスター掲示後このアプリを他校の生徒と交流する際に活用する生徒も見られた。

(2) 2学期号「補聴器・人工内耳を管理しよう」

いつも身につけている補聴器・人工内耳の手入れについて、疎かになっている児童生徒は少なくない。例えば、体育や部活動などで汗をかいても手入れをしなかったり、乾燥剤の期限が切れていてもそのまま使っていることもある。そこで、普段から心がけたい手入れの方法を取り上げ、毎日意識して補聴器・人工内耳の手入れができるようにした。また、本校では定期的に補聴器点検を行っているが、電池がさびていたり、フックが古くなっていたりすることも少なくないため、イヤモールドや電池ホルダーの手入れなどより細かい手入れ方法や注意点も取り上げた。



図2 2学期号「補聴器・人工内耳を管理しよう」



図1 1学期号「コミュニケーション機器を知ろう」

4 補聴だよりの作成

幼稚部保護者向け、小学部児童向け、小学部保護者向け、中学部と高等部の生徒向け、教職員向け、の計5種類をそれぞれ作成した。

発行回数はそれぞれ1～2か月に1回が基本だが、作成の回数にはばらつきがある。

内容は大きくまとめると「新しい集団補聴システム」「補聴器・人工内耳の管理」「オーディオグラム」などである。各学部に合わせて内容・形式で情報を提供することを大事にしなが、今後はテーマ設定をどのようにしていくかを検討したい。

5 各学部での幼児児童生徒への補聴支援

(1) 幼稚部

幼稚部は、基本的には担任が聴力測定を行い、日常の補聴機器の作動状況にも注意している。補聴相談室は幼稚部棟内にあるため、保護者や担任からの補聴器点検依頼は、補聴相談担当者が日常的に受け付けている。

そして、年に3回は聴力測定を行うので、なるべくそのタイミングに合わせて、試聴用ロングチュー

ブで補聴器の音を確かめる、必要に応じてプログラム内容の確認をする、特性検査を行う、乾燥機にかける、といった内容の作業を行ってきた。

故障の疑いがあるときはなるべく早くに修理へつなげるよう、保護者や担任への連絡をするようにした。保護者に対しては、電池の管理や補聴器のプログラム内容について等、機会を見つけて具体的な話をし、理解を深めてもらえるようにした。

## (2) 小学部

年度初めの聴力測定の他に、学習場面での観察や保護者からの連絡をもとに、必要に応じて聴力測定を行った。また、補聴器買い替えの相談や、修理などへの対応も行った。聴こえにくさや、補聴器・人工内耳の故障に気づいて、自分から小学部の聴覚活用委員に伝える児童も増えてきた。

小学部の補聴だよりは、児童向けと保護者向けの両面刷りのものを作成した。児童向けでは、ふりがなを振り、1年生から読めるように配慮し、児童が理解できるように内容に配慮したり、イラストを載せたりした。保護者向けには、家庭で取り組んでほしいことも合わせて載せるようにした。年度の途中からは、児童向けの補聴だよりに、記入する欄を設けるようにした。「オーディオグラムをかいてみよう」「イヤモールドを洗ってみよう」などの内容で行い、提出は自由とした。「イヤモールドを洗ってみよう」では、「今まで自分で洗ったことがなかったが、洗ってみたらきれいになった。これからもやりたい」「お母さんに手伝ってもらったので、今度は自分でやってみたい」などの記述があった。

## (3) 中学部

中学部では、学年や個々の意識の差等に配慮しながら、聞こえに関する学習を行った。

聴力測定後に自分のオーディオグラムをもとに聞こえ方の確認や前に測定したデータとの比較をしたり、校外学習の前に、自分の聞こえ方を相手にどう説明するか考えさせたりした。また、自分の補聴器の機能について友達の補聴器と比較しながら理解したり、音楽を聴く際に使われる機器やその特徴などについて知る機会を設けたりした。また、補聴器の取り扱いや手入れ、故障等の様子を把握するチェックシー

トを用いて、定期的に確認し、自己管理の意識づけを図る学年もあった。

これらの取り組みを進めるうちに、自分から自分の聞こえ方を説明して来たり、体調等による聞こえの変化を伝えてくる生徒も増え、少しずつ意識する様子が見られてきている。また、昨年度行った補聴相談室との連携による補聴器点検や出前授業の内容を、自立活動の授業で定期的に振り返ったことで、自主的に乾燥機の使用やイヤモールドの洗浄を申し出るようになってきている。今後も継続していきたい。

## (4) 高等部普通科

今年度高等部普通科では、補聴機器管理コーナーを設置した。これまで補聴機器管理に関する機器は職員室に保管しており、生徒が目にしたり、使用したりする機会が少なかった。そこで、補聴機器管理に関する機器を、生徒がよく通る教室前の廊下に設置した(図3)。設置した機器は、乾燥機(図4・左)、電池チェッカー(図4・右下)、超音波洗浄機(図4・右)である。各学級には利用方法の案内を掲示し、機器の使用を促した。設置後、補聴機器管理の担当教員に機器を使用したいと申し出る生徒が多くなった。特に、乾燥機や超音波洗浄機は家庭にないため、利用した生徒が多かった。これらのことから、補聴機器の管理に関して以前よりも前向きに関わる生徒が増え、自己管理への意識づけができたと考えられる。



図3 補聴機器管理コーナー



図4 設置した機器

(5) 高等部専攻科

補聴支援としては、聴覚障害に関する種々のテーマを扱う授業の一環として、補聴機器全般やきこえに関する学習を行った。また、生徒の実態に応じて、聴力測定後に、聞こえの確認シートを用いて、オーディオグラム上でどのような音が届いていると読み取れるのかを一緒に読み取ったり、実際にはどのように感じているかを確認したりする時間を設けた。自分のきこえを視覚的に確認することで、届いている音以外にも情報があることを自覚し、目で見てより多くの情報を得ようとする態度につながりつつある。今後も継続して取り組みたい。

6 新たな集団補聴システムの導入

今年度は新たに、幼稚部から小学部3年生までの教室を対象に、デジタルワイヤレス補聴援助システムを導入した。

従来のループシステムはそのまま使用し、ループアンプの外部出力端子と今回導入した新しい送信機をケーブルでつなぐというやり方である。教師はこれまで通りのマイクを使用することになるが、幼児児童にしっかり受信させるためには日常的な管理・配慮が必要となる。

例えば、「使用する補聴機器のプログラムが受信可能な設定になっているか」「使用教室ごとに切り替えがきちんと行われているか」「使用する送信機の電源が入っているか」等々である。

受信機の購入にまつわる手続きの面も含め、今後課題となることは大変多い。

7 幼児児童生徒の良聴耳平均聴力及び人工内耳装着状況（平成27年度聴力記録個人票をもとに）

(1) 学部別の状況

以下、各学部における良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の人数を学部別に図5～9に示した（良聴耳平均聴力の算出に際しては、人工内耳装用者を含めていない）。在籍者数と人工内耳装用者数は表1～5に示した。（平成27年12月現在）

① 幼稚部

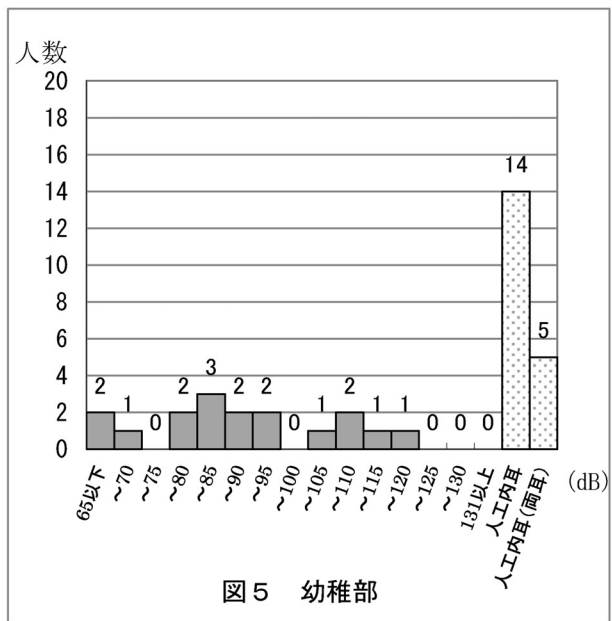


図5 幼稚部

表1 幼稚部の状況

	3歳児	4歳児	5歳児	計
在籍者数	9	13	14	36
人工内耳装用者数	6	5	8	19

② 小学部

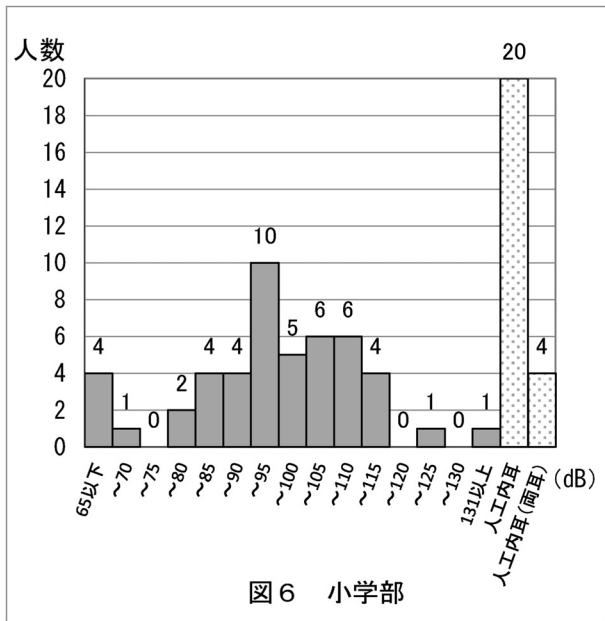


図6 小学部

表2 小学部の状況

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
在籍者数	13	12	12	10	13	12	72
人工内耳 装用者数	1	8	4	1	4	6	24

④ 高等部普通科

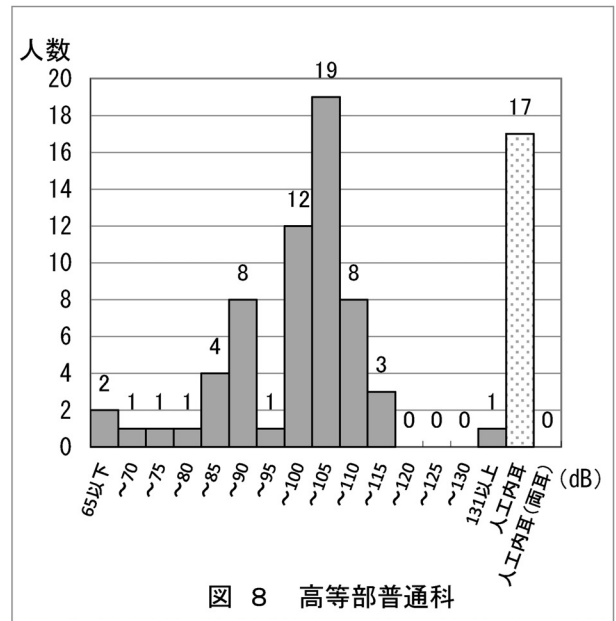


図8 高等部普通科

表4 高等部普通科の状況

	1年生	2年生	3年生	計
在籍者数	27	25	27	79
人工内耳 装用者数	7	4	6	17

測定不能1名

③ 中学部

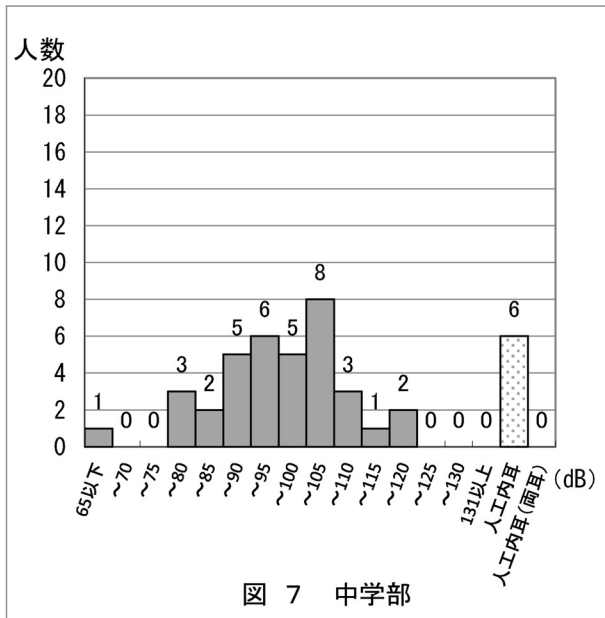


図7 中学部

表3 中学部の状況

	1年生	2年生	3年生	計
在籍者数	14	14	14	42
人工内耳 装用者数	4	0	2	6

⑤ 高等部専攻科

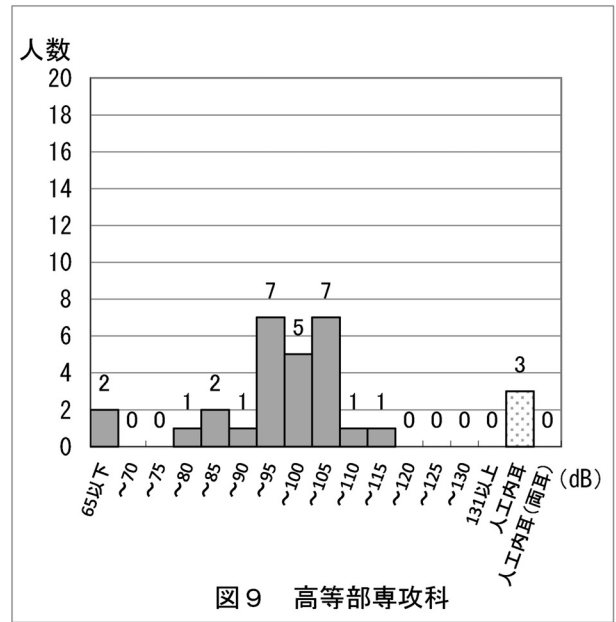


図9 高等部専攻科

表5 高等部専攻科の状況

	造形芸術科	ビジネス情報科	歯科技工科	計
在籍者数	5	12	13	30
人工内耳 装用者数	0	1	2	3

(2) 全校の状況

全校の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者の人数を図10に示した(良聴耳平均聴力の算出に際しては、人工内耳装用者を含めていない)。全校の在籍者数と人工内耳装用者数を表6に示した。

(平成27年12月現在)

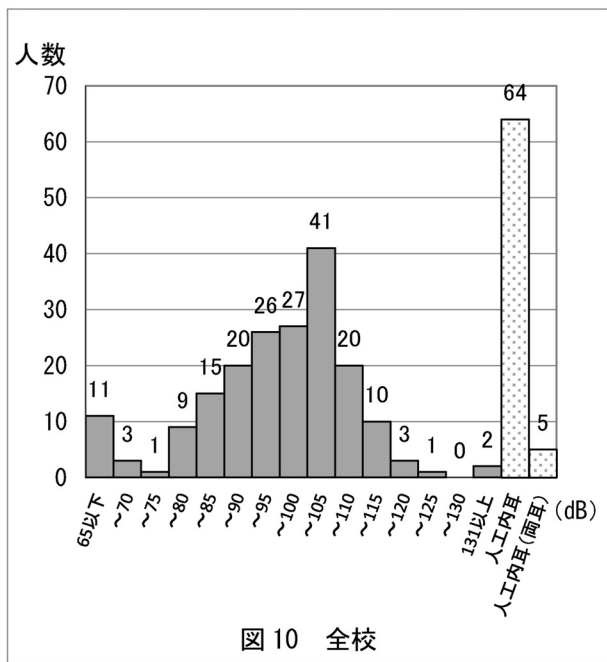


図10 全校

(3) 人工内耳装用者数の推移

本校における、今年度までの人工内耳装用者数の推移を図11に示した。

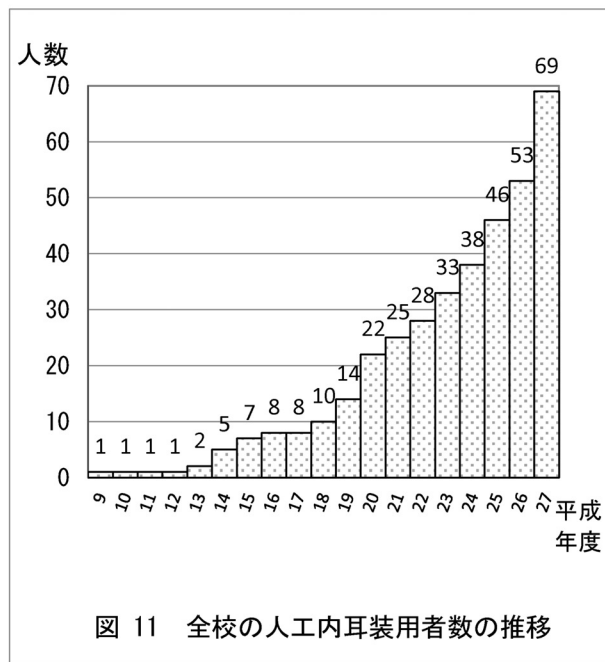


図11 全校の人工内耳装用者数の推移

表6 全校の状況

	幼稚部	小学部	中学部	高等部 普通科	高等部 専攻科	計
在籍者数	36	72	42	79	30	259
人工内耳 装用者数	19	24	6	17	3	69